地域における現代美術考・Ⅳ

―観光資源としてのアート・デザイン―

島屋純晴

著者は、これ迄に各地のアート・デザインを活用した町の活性化事例を調査研究、論考してきた。本論では石川県金沢市が北陸新幹線開業を見据えたうえでアート・デザインと観光の連携を強く意識した、多様な取り組みについての事例を検証すると共に、そこから見えてくる交流人口拡大の方策について言及・論考する。

併せて、金沢市の事例研究から、秋田市の今後の観光施策について、その可能性と方向性についても言及する。

キーワード：アート、デザイン、地方都市における観光戦略

The contemporary art considered in the region·Ⅳ

- Art and Design as tourism resources -

SHIMAYA Yoshiharu

The author has investigated and discussed various cases of vitalization of town which utilize art and design. This paper verifies the case of variety of efforts made by Kanazawa City, Ishikawa Prefecture, with strong awareness on the collaboration of tourism and art/design in view of the Hokuriku Shinkansen opening, and it also refers to and discusses about the measure s for expansion of exchange population that is brought about. In addition, in connection with the case studies of Kanazawa, it also refers to the potentiality and direction of the future tourism policy of Akita City.

Keywords:　Art, design, tourism strategy in regional cities

１　観光文化都市、金沢に見られるアート・デザインを活用した観光戦略を探る

地方都市の衰退が現実味を帯びる中それぞれの地域では、この現状を打ち破るべく様々な施策が試みられている。しかしながら世界の、日本の経済状況の不安定さと、中国を始めとするアジアの各国の経済的な台頭、世界中の政情・市場不安、東日本大震災以降の国内おける不均衡とも言える様々な分野における格差社会の出現など、地方都市の未来はなかなか見通しの築けない状況が慢性化している。その様な状況下であっても、特定の地域においては、これまでの経済施策と異なる価値観を見出し、過去に見られない都市政策によって確実に地域振興に成果を上げる都市が出現しつつある。

著者は、これまでその専門分野である、アート、デザインを活用した都市政策、地域活

性化の視点から、青森県十和田市、石川県金沢市などを対象にその活性化策を調査研究し論考を重ねてきた。そのような研究の中より石川県金沢市の都市政策、特にアート・デザインと観光を強く結びつけ、地域の経済の向上、交流人口の拡大に成果を上げる戦略について取り上げ、その分析を通じて、地方都市の活性化の可能性と、秋田市における地域振興の方向性について言及する。

２　重層的構造を持つ、金沢市の観光振興におけるアート・デザインの活用策

金沢市は北陸地域にあっては、所謂、大規模製造業の数において決して活発な状況にはなく、富山県、新潟県等と比べると、観光産業に代表されるサービス産業の経済が中心を為すともいえる。そうした状況下、長く開業が待たれた、北陸新幹線の長野～金沢間の開通を機に、これまで以上に文化観光都市としての発展に非常に大きな期待と活性化の機運が高まっている。この観光文化都市と言われる都市の施策の実情と、その成果の有り様を研究、検証する。

２．１　JR 金沢駅に見る、観光のためのアート・デザイン活用事例

多くの観光客は鉄道にかぎらず空路を利用した場合でも、小松空港より直行するリムジンバスが JR 金沢駅を起点とすることから金沢駅を始まりとして金沢市の観光に望む。

ここにすでにアート・デザインを最大限活用する戦略が組み込まれている。空路利用のケースでは金沢駅西口、JR 利用の場合中央部が最初の導入部となるが、そこから観光を目的に金沢市中心部に向かうために、駅東口にアクセスすることとなる。

そこにはアメリカの大手旅行雑誌「トラベル・レジャー」のウェブ版において日本で唯一「世界で最も美しい駅 14 選」に選出されるなど、世界各地のメディア等で選出される世界の美しい駅に必ず登場する金沢駅の表玄関が、多くの観光客の意表をつくかたちで現れる。

この地で盛んな能楽で使われる鼓をモチーフにした大きな「鼓門」と、雨天の多い北陸地方で必需品とも言える雨傘をイメージしたガラスの「もてなしドーム」から構成されており、その姿形、スケールはここから始まる金沢観光の始まりを大きく期待させるに十分すぎるほどの力を見せつける。

金沢駅鼓門・執筆者撮影

これらは、完成当時地元住民からは金沢には不釣り合い、そぐわない等多くの反対意見が聞かれたが、北陸新幹線開業直前の現時点ではそのデザイン性を含め、景観構成の戦略から、観光産業の隆盛に大きな役割を担い、金沢のイメージ戦略に大きな役割を果たしていることは明白である。

「もてなしドーム」内観・執筆者撮影

車椅子等の方のタクシー乗り場・執筆者撮影

降雨時も傘の必要がないバス乗り場・執筆者撮影

２．２　金沢駅を起点とする、観光のための２次アクセス

金沢駅を起点とした市内観光ルートについては、そのスケールから見ると十分に徒歩圏内とも言える。しかしながら観光についての市内アクセスについては非常に優れたプランと実践が見て取れる。

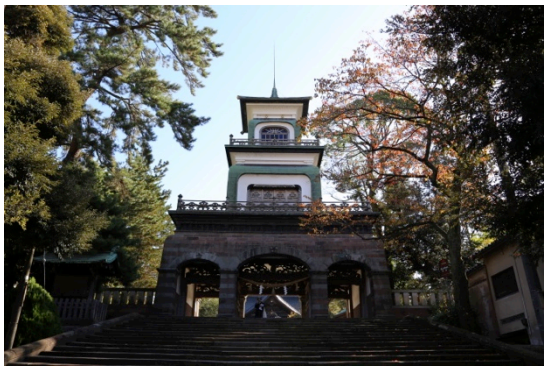
かつては地下鉄やモノレールの導入が検討された時期も在ったようだが、現在は多様な路線バスの整備とタクシー利用に関して、非常に細かな配慮を伴う利便性の向上が図られている。これらの起点となる金沢駅にあるバス・タクシーターミナルは、先に述べた雨傘をイメージしたガラスの「もてなしドーム」のもとにある。雨天や降雪の季節においても傘を必要とすることなく、各種路線バス、タクシーに乗車することが可能な設計がなされ、快適な状況を提供する。また、何よりも驚かされるのが、非常に多種・多様に準備されている各種路線バスについてである。運行日時やルートによって、主な観光ルートを結ぶバスは以下の様な路線が準備され、多様な観光客のニーズに手厚く対応している。

１）城下まち金沢周遊バス（北陸鉄道）
２）金沢ふらっとバス（北陸鉄道）
３）兼六園シャトル（北陸鉄道）
４）金沢ライトアップバス『夜の金澤光の散歩道』（北陸鉄道）
５）金沢ショッピングライナー『まちバス』（JR 西日本）

これらの路線バスは主に観光客を対象としており、金沢駅、兼六園、金沢城址公園、尾山神社、近江町市場、金沢２１世紀美術館、しいのき迎賓館を含む広坂公園、東の茶屋街等をとても利便性高く繋ぐ役割を果たしている。更に、通常の路線バスの整備も行き届き、各主要なバス停留所では運行状況等、待ち時間の予測も可能となっている。

加えてこれら路線バスの運行に際し、ソフト面、特にバス運転手の方々の観光に対するホスピタリティーが素晴らしい効果を生み出している。

時に所謂、金沢弁と言われる、嫌味のない方言を交えながら、非常に丁寧でわかりやすい対応を交え、質の高いサービスと乗客にとって居心地の良い時間を提供している点も見逃せない。車内放送も必要な多国語を提供しており、まさに観光の視点から抜かりのないサービスが日常的に提供される。



主要な観光施設となりつつある尾山神社・執筆者撮影

多くの観光客で賑わう近江町市場・執筆者撮影

市内を走るタクシーについても非常にサービス精神が旺盛でまさに観光地に相応しいサービスを提供している。これは著者の印象に基づく記述となるが、かつて長く金沢に居住した経験から考慮すると隔世の感覚を持たざるをえない。ここ数年に渡り何度も調査研究のため訪れ幾度となく様々なタクシーを利用した経験から判断すると､的確に最短の距離、時間を考慮し、乗客に対応する会話についても非常に満足度の高いサービスを提供してくれる。

城下まち金沢周遊バス

www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp

金沢ふらっとバス・執筆者撮影

２．３　多様な側面を見せる金沢市の文化観光政策のための組織【公益財団法人・金沢芸術創造財団】と【公益財団法人・金沢文化振興財団】

２．３．１公益財団法人金沢芸術創造財団

金沢 21 世紀美術館は【美術館が街を変える】との理念を掲げる現代美術館である。所謂文化行政の視点とともに、観光行政・都市経済効果の観点から地域活性化の成功例としその大きな役割を果たす。通常、地方公立美術館では設置自治体の教育委員会等が主管し所謂教育行政の一部門と捉える傾向がほとんどである。しかしここでは【学芸課】と【交流課】が設置され、設置者である金沢市が美術館の顔というべき展示企画を担当する学芸課を非常に重視し、対外的に誇れる観光政策としても十分に機能するような展観の実施に力を入れる。同様に歴代の館長職に国内のみならず世界的に見ても優れた企画運営に長けた能力を持つ人材を配し、現代美術館としての質の確保と向上に寄与する体制実現させている。

学芸課と同様に、交流課では市民参画の重視、将来を担う子どもに焦点を当て、現代美術を通じた教育を重視している点が見られる。この交流課は教育・子供向けプログラム等、それぞれの専門スタッフが市民とこども・アート・デザイン・音楽や映像・舞台等を通した教育・普及活動を実践している。

休館日にも賑わう 21 世紀美術館・執筆者撮影

金沢 21 世紀美術館・写真提供・金沢市

金沢 21 世紀美術館では、2004 年 10 月の開館以来 2014 年開館 10 年目にして 1,400 万人を超える入館者が数えられた。年間平均 140 万人近い人がコンスタントに足を運んでいる。人口 47 万人の金沢市においては驚異的な数字でありその経済効果、都市ブランド構築、地域活性化の好影響は計り知れない。今春の北陸新幹線開業後は、さらに訪れる人が増えるであろうことは容易に推測出来る。

金沢芸術創造財団ではその他に金沢歌劇座・金沢市文化ホール・金沢市アートホール・金沢市民芸術村・金沢卯辰山工芸工房・金沢湯涌創作の森・金沢能楽美術館を運営し、金沢美術工芸大学とともに新たな文化芸術の創出と、その成果の活用、文化芸術都市の推進に大きく寄与する。

２．３．２公益財団法人金沢文化振興財団

金沢文化振興財団は所謂、観光文化施設の寺島蔵人邸・中村記念美術館・金沢くらしの博物館安金箔工芸館・金沢ふるさと偉人館・泉鏡花記念館・金沢湯涌夢二館・金沢蓄音機館前田土佐守記念館・室生犀星記念館・徳田秋聲記念館・老舗記念館・金沢文芸館・金沢湯涌江戸村・鈴木大拙館の各施設の運営に当たる。これらの施設は、かつて金沢が生み出し、文化都市の礎とも言える文化人や、地域が生み出した文化芸術を観光資源と捉え、その魅力を多く来訪者、観光客に伝え、金沢というブランドを巧みに活用する施策が見られる。

財団は金市役所内に設置され、その名の通り公益財団であるが、その経営方針、手法は民間企業と公営のメリットを非常に効果的に組み合わせ、他都市にはない成功事例をとして市街地の効果的な活性化を創出している。

２．３．３　金沢市民芸術村、金沢職人大学校

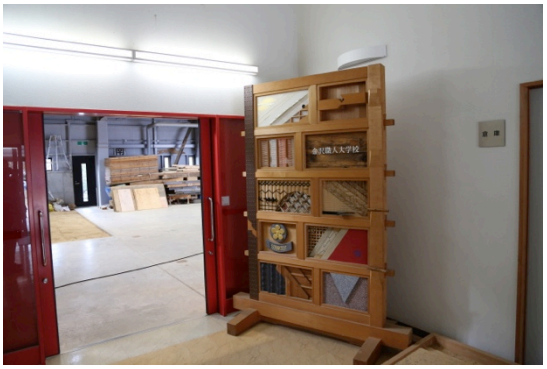
公益財団法人・金沢芸術創造財団が管理運営する金沢市民芸術村は、主に金沢市民を中心に地域の文化芸術に関心を寄せ、そうした市民活動に関わる多くに方のために開設運営される。何よりも驚異的なのは公設の施設でありながら、２４時間体制で利活用が可能である点である。趣味レベルの活動から、プロ活動の予備軍までを網羅し、多様な文化芸術活動のサポート体制を形作る。演劇、音楽活動、写真、絵画、彫刻、工芸作品の制作、展示など非常多様な分野について活動が可能な施設は非常に魅力に富んでいる。かつてより長い歴史を刻む金沢美術工芸大学、そして地域文化・芸術工芸の保存育成を目的とする卯辰山工芸工房、そこにこの市民芸術村が加わり、あらゆる階層の文化芸術活動の実践を可能にしている。更に驚くべきは、芸術村内に設置される、職人大学校が挙げられる。

この金沢職人大学校は、プロの職人としてすでに仕事を持つ若手職人を対象に、文化芸術都市金沢の各文化施設、観光施設、伝統的建造物と景観を未来にわたり維持、補修するための優れた職人の養成施設である。

金沢市民芸術村・執筆者撮影

金沢市民芸術村アトリエ、展示棟・執筆者撮

金沢市民芸術村職人大学校・執筆者撮影



金沢市民芸術村職人大学校・執筆者撮影

金沢美術工芸大学、卯辰山工芸工房等の教育施設では賄うことの出来ない分野の高度な職人の養成を実践し、後継者の育成を行う。従って、その教育研修は通常の仕事を終えた夜間に行われ、左官、瓦職人、生け垣・庭石等を含む造園、神社仏閣を含む大工など伝統文化都市の担い手の育成の現場であり、結果として金沢の末永い文化政策の一翼を担う人材の育成でもある。これらの研修、教育を無償で享受出来る体制についても金沢の文化芸術都市としての都市運営の確実な方向性、施策の確かさを垣間見ることができる。

２章は著者の過去の論考より抜粋、添削、加筆を行い本論の趣旨にふさわしい内容に体裁を整えたものである。

３　金沢市の観光振興におけるアート・デザインの活用策と重層的構造の再確認

これまで、複数年次に亘る調査研究の結果から金沢市の観光政策に係る重層的構造が改めて確認することが出来る。特定の建築、施設設備の整備、伝統的文化施設と、現代の文化芸術の活用、さらには通常は観光施設として捉えられる分野に対する文化政策の導入、通常は公共の自治体が取り組むことがないと思われる交通機関等、ありとあらゆる所に文化政策の考え方が取り入れられ、まさに文化観光都市として、アート・デザインを非常に有効に活用した重層的とも言える観光文化施策が実現されている。こうした事例は国内地方自治体においては極めて稀有なケースであり、容易に取り入れることは非常に困難であると思われる。しかしながら現実に大きな成果を上げ、都市の経済の活性化に寄与する姿を見ると、多くの点を参考としながら、例えばこうした施策の秋田モデルを計画し、さらに独自の姿に発展継承することは十分に可能であり、是非とも参考事例として更に研究調査を継続する必要性が大きいものである。

４　秋田市の現状と今後の都市空洞化の課題解決策としての方向性

現在、秋田市中心市街地は所謂箱物の整備が終了し、市街地活性化の方向性と結果が求められる段階であるが、その実質的な運用施策について十分な検討がなされないまま、ハード整備のみが実施され、十分かつ、本来求められるべき活性化については十分な成果があがっているとは言えない。

開発された地区が想定する顧客層、各施設が見込むターゲット層、どの様な地域からのどの位の集客を見込むのか等々・・・。具体的な商業活動の方向性と経済の活性化についても、実際の人の動向を踏まえ一層の検討を行うことも必要であろう。

こうした点は、これまで調査・研究を実施してきた青森県十和田市のアート十和田、本論で調査研究を行った石川県金沢市の施策等を参考にしながら本県独自の方向性を見出すことも必要である。

今後、行政、民間経済関連事業者、そこに国際教養大学、秋田県立大学、本学等高等教育機関の研究者の研究成果を加え、真に求められる､市街地の活性化の研究と実現を模索、実現すべき時でもある。

例えば、現在構想が進む美術大学の設置地区、新屋地区の開発においてもガラス工房等の設置計画に留まらず、新たな施設設備を如何に運用し、どのような人の流れを創り、そこに関わる人材の実際の経済活動のあり方、経済の方向性についても言及しながら、地域の活性化の方向性を探るべきであろう。

これまで各地の調査研究事例、成功事例ばかりではなく、明らかに失敗事例とも言える地域の調査研究結果を踏まえれば、新屋地区等の構想については明確な方向性を指し示し、より具体的なプランを提言することは十分に現実的である。

５　新屋地区新政跡地の開発計画提言

新屋地区はかつてより、多くの酒造蔵元、味噌醤油等の醸造元が存在していた。しかしながら現在においてはわずか数社が製造営業を継続するにとどまる。こうした現状を改めて捉え直し、醸造、酒造を新たな文化価値として捉え直し、秋田県内の醸造、発酵文化の発信拠点として整備するなどの施策を一案として提言する。全国的に見ても秋田県の醸造・発酵食品が持つ開発能力、製造技術、商品化の力は非常に魅力的であり、十分に国内市場の中で存在感を示し得る分野である。しかし、現状、秋田のブランドとして醸造・発酵食品を発信し、経済活動につなげる試みは各個店に委ねられており、地域の経済活動としては脆弱な状況である。元来、秋田地域に大きな活力を生み出していた醸造・発酵に関する記念館、県内の当該食品を一同に紹介、販売する施設、実際に食し体験することが出来るレストラン等、県内全体を視野に入れ、全国に発信するための施設は秋田県内でも存在しない。もちろん詳細なプラン、施策は専門家による十分な検討検証が必要となるが、可能性として非常大きな期待が持てるものである。

更に、由利本荘地区、仙北地区等との連携を深め、秋田独自の食材の開発・生産等を取り込み、秋田県広域の食文化の発信基地として捉えれば、大きな可能性が広がる。

あくまでも、これまでの調査研究の成果に基づく計画の一例にすぎないが、ハードの整備計画とともに、実際の現場の経済活動のあり方、関わる人材等の経済活動と現実的な日常の中にある様々な諸問題を洗い出し、地域の持つ問題を、アートとデザインの力によって、活性化、全く新しい文化・芸術を活用した交流人口の拡大、観光施策を構築することが求められる時代で有り、現実的な方策として、本研究等の県内高等教育機関の研究成果を活用することも重要であろう。